

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：郭 東坤

郭東坤氏の博士号請求論文『夏目漱石の小説における記憶の政治学—新聞連載小説の読者の視座から—』は、従来の研究が単行本のかたちで漱石の作品を分析しがちであったのに対して、初出の新聞連載という形態に注目し、過去に、あるいは同じ日に掲載された多様な新聞記事の情報が、漱石の新聞小説を読む読者の意識にどのように作用し、意味作用を生じさせたのかを分析した論文である。

第一章では、『三四郎』のヒロインである美禰子の造形に、森田草平と平塚明子の心中事件である塩原事件の報道、ならびに豊多摩郡西大久保村で起きた「出歯亀」事件の報道が影響を与えていることを指摘した。そのうえで、「愚弄」という、小説と新聞記事を繋ぐキーワードに注目し、男性共同体のなかで「悪女」に仕立て上げられていく美禰子の表象の政治性を分析した。

第二章では、『それから』の連載が、「実業家廻り」という連載と同じ紙面に掲載されていたことに注目し、主人公の代助の父親への批判が孕んでしまう「実業家廻り」への緊張関係について論じた。そのうえで、父親の資本に依拠した代助の批判の欺瞞性すら、最後には、三千代によって相対化され、揺るがされてしまう事態について記述した。

第三章では、『門』の冒頭で、安重根による伊藤博文暗殺事件が喚起されていることに注目し、主人公の宗助たちが引きこもる「山の手の奥」が実は植民地と深く結びついていることを論証した。その際にも、宗助の妻の御米が抑圧された記憶を呼び戻す媒介として機能していることを指摘した。

第四章では、『彼岸過迄』に登場する「高等遊民」や「探偵」というキーワードを、大逆事件の新聞報道と結びつけるとともに、須永にまつわる問題が階級問題としてまとめられることを指摘し、物語の設定が当時の読者に発揮してしまう政治性について論じた。

第五章、第六章、第七章では、『心』を取り上げ、本作が、昭憲皇太后の死や、乃木希典の妻の乃木静子の死についての報道と深い繋がりを持っていることを論証した。そのうえで、彼女たちと同じ「未亡人」という系譜にある静が、先生による意味づけに抗い、主体的な生き方を見出していくさまを素描しようとした。

以上のように、本論文の特長は、漱石の新聞小説が、女性と植民地という当時の新聞報道における無意識の領野を積極的に取り込み、物語を駆動させ、新聞紙面との緊張に満ちた対話関係を実現していた様態を説得的に論証した点にある。

審査委員からは、時系列順に漱石の新聞連載を取り上げているのに『行人』論が抜けていることに言及がないのはなぜか、「新聞読者」と言ったとき女性読者の問題はどこまで視野に入っているのか、韓国併合や満州の問題についての漱石の見方をもっと丁寧に論じるべきではないか、引用された新聞記事には本論で言及される以上の様々な情報が満ちているのではないか、紙面が作られていく力学、都市と地方の情報伝達の時間的差異など、論じられることはまだ多いのではないか、などといった疑問が出された。

しかし、本論文が新聞連載小説という形態に一貫して着目することで、漱石の作品の読解のまったく新たな地平を切り開いたという点で、審査委員の意見は一致した。当時の新聞記事を一つ一つ丁寧に追った作業は、本論文に高い説得力を与えている。のみならず、本論文は、文学作品が発揮し得る、国民共同体のイデオロギーに対する攪乱の可能性の優れた論証ともなっている。『行人』論についても、審査員からの示唆を受けるかたちで、近い将来に補遺として書かれる構想が語られ、それは非常に有望な道筋になることが確信できた。

以上のことから、本審査委員会は、郭東坤氏に対して、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。